たかさご史話61

～一茶の句～

前回に続き、一茶が高砂に来て詠んだ句について説明します。まず、曽根天満宮での句。

世の人に
見よと枯れたか松片枝
散松葉

昔ながらの掃除番

前者の句は、実は作者によって墨で消されています。意に満たない句であったのでしょう。曽根天満宮の名松が片枝枯れてしまっているのを惜しんで詠んだものです。世の人への警鐘として、松は己れの枝を半分枯らせたのであろうか、というもの。警鐘の内容はいくらでも考えられそうです。この句には季語がありません。やはり未完成です。後者は、変わらぬ松とその散松葉を掃除してきた人、つまり年々歳々繰り返すいとなみを詠んでいますが、その背後には、曽根天満宮と松の歴史の古さに敬意が払われています。季語は「散松葉」で夏。

十かへりの
花いくかへりの石室かよ

これは石の宝殿での句。「十かへりの花」は百年に一度咲くといわれる松の花のことです。今、石の宝殿の側には松の花が咲いているが、百年に一度咲くというこの花が、いったい何度咲いたことだろう、という意味で、やはり、石の宝殿の永久を讃えています。季語は「松の花」で春。

先づしるき
前の池哉さくら哉

田中布舟邸を訪ねて、挨拶の一句です。布舟は、自邸を暮桜亭と称していました。桜が植わって美しかったのでしょう。酒造家で富豪であったようですから、豪邸が想定されます。邸内に通されてまず目に入ったのは、庭の池、そして暮桜亭の名にふさわしい見事な桜、であったのでしょう。美しい庭の池と桜をほめて、挨拶の吟としました。季語は「桜」で春。

これらは、寛政七年三月十三日に詠んだ句で、同日に夏と春の季語を詠んでいますが、「散松葉」はまだ夏の季語として確定していなかったのかもしれません。

世の人に警鐘を鳴らす曽根の松の威厳や、石の宝殿の歴史の古さを讃え、訪問した布舟の邸宅をほめる、一茶の句は、その地の名所旧跡や人物を讃えた、典型的な旅の俳句といえるでしょう。

（市史編さん特別執筆者　富田志津子）

▲ 曽根天満宮にある一茶の句碑